

蜂蜜がおとがい垂る朝々をニュースにまみれ生き
てゆくのか 加古 陽

三句以下、いそがしい新聞社に長く勤めてきた感慨が
読者にも伝わってくる。二句切れである。「垂る」を連
用形にしないで終止形にしたことで、場面としての今朝
の朝食がクローズアップされたかたちになった。

秋の水すこし手に取り撫でやれば粘土は魚のやうに
撓へり 野原亜莉子

人形作家である作者には、粘土は親しい素材なのだろ
う。粘土が一気にやわらかく、しなやかになるイメージ
が楽しい。私たちは大人になると、ふつう粘土にさわる
機会はほとんどない。私などもここ何十年も粘土に触つ
たことがない気がする。なつかしい感触。

主査以外マイクをオフで主査だけは時折衣擦れの音
がする 奥村知世

博士論文を提出、ズームで発表し審査を受ける場面に
取材した作。緊張ぶりが読みどころ。作者の発言中でも、
主査の人のマイクがオンになっているので、その人の身
じろぎや咳払いなどが、作者の耳にひびく、というのだ。
ややわかりにくいのが、なんとか分かる。

保管期間長くなりたる在庫らのささやく声の漏るる
雨の日 佐藤博之

発振器部品とか振動子部品とかの機械部品の保管倉庫
に取材した今月の一連である。素材そのものの持つ重量
とか静寂とか、独特のなんとも言えぬ質感が持ち味に
なっている。やや無謀な擬人法も、言ったような独特の

短歌の現在

No.477 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

質感によってカバーされていると読む。

我のみがリモートゼミの日教室を見ている監視カメ
ラのように 吉川七菜子

作者以外のゼミ生は教室に出ている、作者だけがリ
モートで参加しているらしい。参加しているというよ
り、外野から見ている感じなのだろう。「監視カメラの
ように」が枠外にいる感じを的確に表現している。

畑には落花ぼつちが並びおり わたしの街の秋の風
景 高橋佳子

あまり聞いたことがない「落花ぼつち」が主役の一首。
歌にあるように、落花生の産地である千葉県八街市独特
の風景らしい。一首前に「逆立ちで畝に並んだ落花生や
わらかな陽をたつぷり浴びて」とあるように、落花生の
水分を抜くために、掘り出した蔓についたままの落花生
を、豆をなかにして円筒状に積み上げ、笠をかぶせたも
のが、落花ぼつち、だという。ネットにたくさん写真が
出ている、私も初めて見た。

「遊星」と言う名懐かし夜空には木星土星火星が遊
ぶ 宮地竹史

大空でゆつたりと遊んでいる星たちの壮大なパノラマ
が見えるようで、楽しい一首に仕上がっている。結句の
「遊ぶ」がきいている。天文の専門家ならではの一首と
思う。かつては「惑星」と同じ意味で「遊星」という語
が使われていたが、現在は使われなくなっただけらしい。

舌先はガキのままなりハイボール百円ちよいをシン
クに捨てる 帖佐光浩